



News letter

文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究
領域略称「人工光合成」領域番号 2406
人工光合成による太陽光エネルギーの物質変換：
実用化に向けての異分野融合

計画班からの一言

U30 若手研究者育成シンポジウム

A04 班班長 石谷 治

本新学術領域の若手研究者育成プログラムの一環として、「第1回若手研究者育成シンポジウム～光化学の新たな展開～」が6月30日に北海道大学において開催された。今回は、その報告をさせていただく。

本領域は、「人工光合成」の旗印の下、日本におけるこの分野のトップクラスの研究者が結集し、お互いに協力また切磋琢磨することで、人工光合成の科学と技術の飛躍的発展を目指している。班員は、これから頻繁に時間と場所を共有し、議論を活発に行う機会を得ることが出来る。しかし、本領域の目標を達成するために大変大切な、班員の後に続く若手研究者（学生、ポスドク、若手スタッフ）の育成にも努めなければならない。この若手研究者育成プログラムは、本領域の班員が主催する（特に共同研究を開始する）研究室間の交流を深め、また若手研究者の育成に資するために、研究室の若手スタッフや学生が主体となって、様々な形態での講演会等を行うというものである。6月初旬に開催された合同班会議において、A02 班の八木新潟大教授によって U30 (under 30 years old) と命名されたのをご記憶の方もおられるであろう。

今回は、北海道大学（喜多村研究室、加藤研究室）と東京工業大学（石谷研究室）の若手スタッフ（小林厚志北大講師、作田絵理北大助教、森本樹東工大助教）と学生が主体となって講演会および交流会を企画運営した。テーマは、各研究室共通の関心事である「金属錯体の光化学的性質および光触媒特性」とし、各研究室から3-5人の大学院生が、各人20分間発表を行い、その後10分間の質疑応答を行った。また、喜多村研究室のご出身で、最近 Prof. T. J. Meyer 研究室 (Univ. North Carolina at Chapel Hill) での留学を終えて帰国された伊藤亮孝先生（大阪市立大学 助教）に招待講演を行っていただいた。基本的に教員は質問しないという原則を事前に決めていたので、10分間も質問が続くのか少し不安に感じていたが、全くの杞憂であった。全ての講演で、学生諸君が多くの質問を行い、熱心に議論する姿を見て、教員一同、本シンポジウムが成功裏に進行していることを確信した。その後の懇親会で、学生達はさらに交流を深めたようである。帰京した後、参加した学生に聞いてみると、皆大変有意義であったと感じたようである。今後は、学会や討論会などで、今回行った議論を、学生同士でもさらに発展させてくれるであろうと期待している。教員からも、

その教育成果が十分価値のあるものであるので、今後研究がさらに発展した時点で、再度同様のシンポジウムを企画しようとの提案が出されている。

皆様にも、若手研究者育成シンポジウムを行われることをお勧めしたい。もし運営上のご質問があれば、石谷までご連絡ください。ちなみに、第2回若手研究者育成シンポジウムは、「光エネルギー変換を目指した光触媒の開発」を主題とし、新潟大・八木研究室と当研究室合同で9月に開催する予定である。

最後に、今回のシンポジウムを主体的に行ってくれた学生の一人に書いてもらった報告を転記することで、本企画の報告を終わらせていただく。



セミナーで活発に討論する学生の様子

「若手研究者育成シンポジウムを体験して」

浅谷 剛（東京工業大学大学院 理工学研究科
化学専攻 博士課程3年）

平成25年6月30日(日)、北海道大学理学部7号館219/220セミナー室(北海道札幌市)にて、上記シンポジウム「若手研究者育成シンポジウム～光化学の新たな展開～」が開催された。このシンポジウムは、北海道大学の加藤研究室および喜多村研究室、東京工業大学の石谷・前田研究室の3研究室が合同で企画・運営し、各研究室から28名の参加者が集まった。

開催のきっかけは、今年の2月に私が北大の学生に相談し始めたことにある。私は、多くの学会発表の場に出ることで、同じ分野で研究に励んでいる同世代の他大学他研究室の学生と交流する機会を得ていた。そのおかげで、お互いに良い刺激となって研究に励むことができたと感じていた。後輩たちにもこのような貴重な体験をしてもらいたいと心から願っていた。しかしながら、学会では、まとまった研究成果が出ている学生しか参加することができないため、研究を始めたばかりの後輩たちや成果が得られにくい研究をしている学生たちには、学会のような機会はあまりない。



News letter

文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究
 領域略称「人工光合成」領域番号 2406
 人工光合成による太陽光エネルギーの物質変換：
 実用化に向けての異分野融合

そこで、様々な学生がお互いに刺激しあう場を提供するには、違う研究室を交えて合同でシンポジウムを行なったらいのではないかという思いで、このシンポジウムの企画を行った。学生たちに提案をし、その後、各先生方の了承を得て、シンポジウムの開催が決定した。

このシンポジウムのコンセプトは、同分野の学生同士の活発な議論の場の提供である。特別講演を除いたすべての発表は学生のみで行われ、発表 20 分・質疑応答 10 分のスケジュールで行われた。質問は、学生中心になるように配慮し、先生方の質問は 1 つ程度になるようにした。当日は、多くの学生が積極的に議論に参加し、研究に対する疑問点をなくしていく様子が感じられた。議論の中で、発表者にとって不明なことを解決する改善案を提案する学生もいた。また、対外的な発表が初めての学生の中には、他の学生からの質問にうまく答えられずに悔しい思いをしたと反省し、今後の研究に精進する意思をあらわにしてくれた人もいた。私の研究室から参加した学生たちは、「もっと前からこんな合同ゼミがあれば良かった。」「また参加したい。」「もっと学会にも参加したい。」と嬉しい感想を聞かせてくれた。我々にとって初めての試みではあったが、参加した学生皆がお互いに切磋琢磨できる良い環境を、この合同シンポジウムで提供することができたと私は感じている。

最後に、突然の提案にもかかわらず、快く引き受けてくださった北海道大学加藤研究室、喜多村研究室的皆様、大阪市立大学 伊藤亮孝 先生には心から感謝いたします。また、加藤研究室 小林厚志先生、喜多村研究室 作田絵里先生には、合同シンポジウムの運営について多大なるご助力をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

web: <http://cls.kuicr.kyoto-u.ac.jp/bsj2013/symposium.html>
 問合先：石北 央（大阪大学大学院理学研究科）
 E-mail: hiro@bio.sci.osaka-u.ac.jp

新学術領域「人工光合成」ニュースレター

第 1 巻・第 4 号（通算第 4 号）平成 25 年 7 月 19 日発行

発行責任者：井上晴夫（首都大学東京 都市環境科学研究科）

編集責任者：八木政行（新潟大学 自然科学系）

<http://artificial-photosynthesis.net/>



お知らせ

●日本生物物理学会第 51 回年会のお知らせ

10 月 28 日から 10 月 30 日まで京都市（国立京都国際会館）にて日本生物物理学会第 51 回年会が開催されます。新学術領域「人工光合成」では、本年会で以下のシンポジウム（発表言語：英語）を開催します。

「光駆動水分解の分子機構：光化学系 II と人工光合成」（オーガナイザー：石北 央（大阪大）、野口 巧（名古屋大））皆様のご参加をお待ちいたしております。

日時：10 月 28 日（月）午前中 9:45 ～ 12:15

場所：国立京都国際会館

演者：八木政行（新潟大）、正岡重行（分子研）、神谷信夫（大阪市大）他数名

事前参加登録：6 月 3 日（月）～8 月 8 日（木）

ホームページより受付。